

協同組合における理念と経営

農協が農業の構造改革を阻害している等の農協批判が一部から提起されているなか、この秋のJA全国大会を迎えようとしているが、農協を巡る議論において、私自身が常に気にかけるのは、協同組合における理念と経営の関係という問題である。

農協系統においては、協同組合運動の名の下に経営問題を軽視するという風潮が見られる場合がある。確かに、協同組合は利益追求を目的とはしていないが、その理念・目的を達成するためには、様々な機能を維持・発揮していく上での経営体としての健全性の確保、すなわち経営面の確固とした裏付けが不可欠であることは自明の理である。したがって、経営的側面を無視・軽視した単なる運動論的・教条主義的な議論というものは、極めて無責任な評論家的議論であり、百害あって一利なしである。むしろ、協同組合という崇高な理念を掲げている以上、経営に対する責任は一般企業以上に重はずである。

一方、協同組合としての理念を無視・軽視した経営至上主義は、もはや協同組合を名乗るべきではない。協同組合の理念は、ICAの協同組合原則に見事に整理されているとおりであるが、一言で言うならば、それは、人間的価値観を重視する組織・活動ということである。協同組合は、自ら資本主義経済の中に身を置き、事業面では一般企業と競争しつつも、競争原理への過信や利益・効率性至上主義がもたらす様々な非人間的なひずみといった、資本主義が内包する負の側面を認識・否定し、社会的存在としての人間的価値観を基本に据えて、組合員・地域住民の経済的・社会的・文化的願いをかなえることを目的とする存在であり、この点にこそ現代社会における協同組合の存在価値がある。

この理念を一般企業との比較に置き換えて言うならば、農協は協同組合であるがゆえに、農業・農村に責任を持っているということである。一般企業の場合、事業や収支が成り立たなければ、その分野なり立地に進出しないし、失敗した場合には撤退すればそれで済む。しかし、農協の場合には、農業や農村から撤退する訳にはいかない。それが農協の宿命であり、使命と責任である。いわば、農協は農業・農村・地域社会と運命共同体であるという基本的性格を持っており、そこが一般企業と決定的に異なる点であり、協同組合の理念に基づくゆえんである。

問題は、協同組合としての理念と経営という一見矛盾するような二つの側面をいかに調和させ、両立させるかということである。幸いにも、わが国においては、協同組合的理念による村落共同体運営が行われている。また、最近、ボランティア活動やNPO、NGOといった協同組合理念に近い活動も活発化しているし、企業においても従来の利益主義とは価値観を異にするCSRの重要性に目覚めてきている。まさに、協同組合の価値観を広めていくうえでは好機である。農協批判に応えていくには、農協が協同組合としての理念と経営を強固なものとし、わが国の食料・農業・農村や消費者・地域住民にとって有効・不可欠な機能を果たし続けていくことにより、国民の理解と共感を得ていくことが、最も有効かつ最大の反論となる訳であり、そうなることを期待もし、確信もしている。

((株)農林中金総合研究所常務取締役 越智正也・おちまさや)